

おはなしゴブリン

杉並太郎

丸美はその日が来るのをずっと楽しみにしていました。

これまででは、おじいちゃんからお話を聞くのが丸美の一番の楽しみでした。お正月におじいちゃんの家に行く時も、お年玉よりおじいちゃんのお話が目当てでした。

「もう知っているお話は全部話してしまったよ」おじいちゃんからそう言われた時は、丸美はすごくがっかりしたものです。でも、おじいちゃんはこのうけだったのでした。

「今度、知り合いが集まってお話をやるから、お前も来るといい。わしなんかより、ずっとたくさんのお話を知っている人たちが集まるんだよ」

丸美は本を読むことも好きでした。妖精や魔法使いの本、怪盗や名探偵の本、宇宙船や火星人の本、どんな本にも楽しみがいつぱいつまっています。でも、お話を聞くのはそれは別の楽しみなのです。ちょうど、マンガを読んだり、アニメをみたり、ゲームをしたりすることと本を読むことが別の楽しみであるように。ちょうど、八

ンバーグとケーキが別のおいしさであるように。雪の降る節分の夜でした。おじいちゃんが丸美の家までお迎えに来ました。いよいよお話会の日なのです。お正月から二ヶ月も待ちました。おじいちゃんは知らない人の運転する車に乗っていました。助手席に乗っている人も知らない人です。丸美は後ろの席でおじいちゃんの隣に座りました。ふだん丸美は知らない人は苦手なのですが、おじいちゃんのようにお話をしてくれる人だと思うとわくわくしてきて、「くんばんは、よろしくお願ひします」と丁寧にあいさつしました。すぐにもお話会に行くのかと思ったら、おあさんがいつまでもあいさつしていてなかなか車が出発できません。ようやくあいさつがかわって車が出発すると、おじいちゃんもほっとしたようでした。

「……これはこれは。今夜はかわいいお客さんがいっしょだね。うん、いい考えだと思うよ。今度から子供も何人か呼ぶことにしたらどうだろうね。お嬢ちゃん、お話好きかな。おじさんたちはお話が大好きなんだよ。それに今夜は料理もいっぱいあるからね。なにしろ、こういう寒

「一夜には温かいシチューが一番だから」

丸美たちは大きな部屋に通されました。その部屋にはテレビがなくて、その代わりに大きな暖炉があつて薪が燃えていました。友だちの友美ちゃんの家にも暖炉がありますが、それは暖炉の形をしているだけで本当は電気ストーブなのです。この家の暖炉では本物の薪が燃えていました。炎はたえず形を変えていて、それを見ているだけでも飽きません。ときどき、ばちつと炎がはせて丸美をびっくりさせます。

テーブルもコタツもなくて、みんな床に座りました。でも絨毯がふかふかで、床暖房も入っているようでした。とても暖かくて、丸美は冷たいジュースが飲みたくなりました。すると、大學生くらいのお姉さんが、ジュースを持ってきてくれました。でもコップではなくて木のお椀に入っています。おとなの人は同じようなお椀でお酒を飲みはじめました。そしてお話が始まったのです。

今日は何回目のお話会だったかな。誰も数えちゃおらんから分かりやせんが、百回目や千回目じゃないことは確かだな。なにしろ、昔は冬

になると獲物はみんな穴の中にこもっちまうし、その頃はまだ米だの麦だのはなかったから、土を掘って芋やら根っこやらを食っていたもんだ。今日みたいに冷たい雪の降る日なんかは、もう本当にすることがないもんだからみんなが集まって、あることないこと話すしかなかったんだわ。あの頃は火を焚いたって煙突ってもんを知らなかったからな、もう洞窟の中は煙だらけになったもんだ。みんな顔じゅう煤だらけにしてな、木の根っこを齧りながら、それでも夢中になって話を聞いたものさ。あれからどのくらい経ったっけかな、一万年だか十万年だか。

むかしむかしと始めるだけがお話じゃあないよ。これはほんの十年か二十年まえのことなんだ。ああ、お嬢ちゃんには十年前でも大昔かもしれないがね。じいさんがそのまたじいさんから聞いた話でもない。何を隠そうこの俺が体験したとき。あの頃はまだ馬鹿みたいにガンガン働いていてさ、えらく寒い日だったよ。不凍液が凍っててエンジンがかからなくてね。ばかな話だが、本当に不凍液が凍ってたんだぜ、シャーベットみたいにさ。ガレージで焚火したり、ラ

ジエータにお湯かけたりしてなんとかエンジンをかけたんだよ。そして酒の配達。酒つてのは飲むもんで配達するもんじゃねえってことも知らなかったんだから、若かったねえ。

それで配達に出てみれば、道には車なんか一台も通っちゃいない。しばらく走っていると夕べの雪であたりは真っ白。なんだか、寂しいっていうか変な気になってきてね。そのうち小便がしなくなってきた。いや、車のエアコンの効きが悪くて、冷え込んでね。ちよつと車を留めて立ち小便つてことにした。で、小便しながらふと顔を上げると、畑の中に誰かがいる。背骨の曲がった小さなじいさんみたいだ。こんな日に畑仕事もねえだろうとは思ってたんだが、まあ俺だって働いてるんだからと思ってたね。ところが、小便しおわってからまた見ると、誰もいないんだ。こいつはやばいと思った。年寄りが寒い中無理するから、倒れたに違いない。あわてていちもつをしまうと、じいさんのいたあたりの畑に入ってしまった。だけど、そこには誰もいなかった。ああ、俺の見間違いだと思ったよ。でも、雪の中に倒れてて見えないのか知れないと思ってな、そのへんを捜し回ったんだ。そしたらな、足

跡があったんだよ。何もないとこから突然始まって、何もないとこでいきなり終わるはだしの足跡が……。

それにな、思い出してみるとあの顔は人間にしちゃあひどかった。それでもその時は見間違いだと思っただがね。年を取っているんな経験をしたり、このお話会でみんなの話を聞いたりするうちに、世の中には不思議なことが実際にあるってわかるようになってきてね。あれは見間違いじゃなくて、本当にあったことだと思うようになったのさ。

ゴブリンさ、そいつは。

そもそもなぜわしらが毎年集まってお話をしているのか、そのわけを会を代表してわしが話しておくことにしようかの。

最近の世界が狭くなったというか、食べるものにしたってパンだのシチューだのハンバーガーだのとよその国の食べ物がいっつでも食べられるようになった。わしらの好きな物語にしても、世界中の物語が日本語に訳されて本になっている。それにつれて、あいつらの世界も変わって来ているんじゃないよ。あいつら、妖怪やら化物やら妖精

たちもな。やつらのことを書いた物語にくっついて来たのか、それとも人間に化けて飛行機に乗ってきたのか、そのへんのところはわたしにはわからん。だが、最近じゃあこのへんにも住み着いている様子じゃな。

まあ、やつらはやつらなりに気に入った場所があるのか、それとも縄張りでもあるのか、羽根のある綺麗な妖精とか、色っぽい水の精霊なんてのは、とんと見かけたことがないな。その代わり、このへんにはどうやらゴブリンが住み着いているらしいんだな。ゴブリンというのは地面の下に住んでいる醜い小人でな、妖精なんかに比べると確かに地味な存在でな。じゃが、わしらにとっては実に貴重な存在なんじゃよ。

ゴブリンは妖精と違って、歌ったり踊ったり恋をしたりして楽しく過ごすということはあまりしない。土の中で岩を掘ったり、鉱物を細工したりという生活だ。じゃあ、楽しみはないのかというと、そんなことはない。やつらの楽しみは、そう、わしらと同じ、お話をする事なんじゃ。しかも、人間の聞いたこともないような話をたくさん知っている。なにしろ、妖精たちの噂話や、風の精霊の見聞録なんかを聞いている

んだから。

そうと知ってから、ゴブリンの話を聞いてみたいというのがわしの願望になってな。なんとかゴブリンを捕まえてやるうと、モグラ用の罠を十倍にもしたのを仕掛けてみたり、地下室に金貨の袋を置いてみたりしたものだ。だが、どうやってもゴブリンは捕まらなかった。後ろ姿は何度か見かけたし、一度はばったり正面から鉢合わせまでしたものだが、何しろわしも年だし、やつらはすばしいし。

そんな時、わしは思いついたんじゃよ。わしらがゴブリンの話を聞きたいように、ゴブリンもわしらの話を聞きたいんじやないかってな。お話好きとはそういうものじゃろ。それで、このお話を始めたんじや。暖炉のあるログハウスを建てたのも、鉄を嫌うと聞いたからだよ。お話が恋しくなるこの季節に、暖かい部屋と温かい料理、それに人間界のお話を一ヶ所に集めれば、ゴブリンだって出てくるというものだろう。それに、わしはゴブリンを捕まえなくてもいいんじや。そのお話を聞ければな。

お話ははまだ続いていましたが、お母さんが迎

えに来たので丸美は帰らなければなりません。

「どう？ おもしろいお話は聞けた？」

「うん、あのね、大岩転がしてっていうの。地下のトンネルをゴロゴロゴロゴロって大岩を転がすんだよ。こっち側とあっち側から転がして、まんな中でドツカーン。そしたら、今度は相手の岩を転がすの。岩はもと来た道を帰って行くけど、押してる人は、ほんとは人間じゃなくてゴ布林なんだけど、ゴ布林っていうのは地下に住んでる小人なの、押してるゴ布林たちは道があっちからこっちまで行くんだよ。それで、ゴ布林のお姫様がもとで大岩転がしをすることになったの。ゴ布林たちはお姫様が大好きなんだよ。ゴ布林にはあんまり女の子が生まれないんだって。だからお姫様はすごく大事にされるんだよ。それでね、大岩がトンネルのまんな中でドツカーンってぶつかるよね、すっごいショーゲキでね、地面がグラグラって揺れるんだって。この間の地震も大岩転がしがあったのかもね」

「おやおや、あんまりお話を本気にしちゃダメよ」「うん、ちゃんとお話だっわわかってるよ。でもね、ゴ布林はほんとお話がじょうずなの」「